三　東京外事専門学校時代　一九四四－一九四九年

日本が第二次世界大戦に突入すると、東京外国語学校も、戦時体制の影響をもろに受けるようになる。一九四二（昭和十七）年、修業年限が六か月短縮され、四三年九月に四年生は繰り上げ卒業となる。これが、東京外国語学校の最後の卒業式になる。同時に、三年生も、七割が学徒出陣に、三割が勤労動員に駆り出される。このような修業年短縮などの臨時措置を制度的に固定するために、四四年、東京外国語学校（四年制）は、東京外事専門学校（三年制）に強制的に移行される。戦後すぐの五一年までの七年間の存在でしかないが、独語部は、ドイツ科と改称され、東京外事専門学校の第二部の一つの科になる。四一年の東京外国語学校入学者は、東京外事専門学校の卒業生として四四年に臨時措置により卒業する。四四年の教師陣は、以下のように、東京外国語学校時代のまま、引き継がれている。

一九四四（昭和十九）年

教授　　　生駒佳年、青木重孝、植田敏郎、藤田五郎
外国人教師　ワルテル・ロエン
外国人講師　マルテイン・ネトケ

一九四四（昭和十九）年に、東京外事専門学校の第一回入学式が催される。旧東京外国語学校と同様、生徒定員や入学定員については学則に規定がないが、同年の入学定員は約三〇名だった。学科目外国語（ドイツ語）の時間数は、東京外国語学校時代一年生の場合、週二〇時間だったが、東京外事専門学校では一年生の場合、年間七〇〇時間にな

っている。ただし、第二外国語が影をひそめる。なお、四六年三月に、東京外国語学校の最後の、すなわち四三年入学の学生が卒業。また、四八年の入学式は東京外事専門学校最後のものとなる。
　存続七年間の東京外事専門学校の入学者数二三五名、卒業者数は、東京外国語学校入学者も含むが、九七名になる。三分の二の生徒が卒業しなかった（できなかった）ことになる。なお、創立以降の東京外国語学校時代（東京外事専門学校時代を含む）の独語科総卒業生数は九八三名である（選科卒業生を除く）。

四　東京外国語大学時代　一九四九年―現在

1　変遷

　国立学校設置法の施行により、一九四九（昭和二十四）年五月三十一日、六九校の一つとして、東京外国語大学（四年制）が設置される。一二語科の一つドイツ学科として、英米、フランス、ロシヤ、イタリア、イスパニヤ、ポルトガル、中国、蒙古、インド、インドネシヤ、シャムとともに設置された。学生定員は三〇名、ただし、翌年には四〇名になる。発足時の在籍者数は三四五名だが、時代の変化を受け、男女共学制が導入され、女子学生の入学が可能になった。なお、ドイツ学科の女子卒業生第一号は一九五四（昭和二十九）年の新制大学第二回卒業生根本よしである。この年に卒業した女子学生は他三名だった。なお、一八九七（明治三十）年より五五年間続いた専修科は廃止された。また、東京外事専門学校は、東京外国語大学に包括される形で、一九五一（昭和二十六）年まで二年間存続